

7. 冒険学校の新しい行方

農山村においてフィールドワークを行う自然文化誌研究会は調査地域において、伝統的な文化や技術を学んでいる。農山村は既に、全国的にも急激な過疎となっており、その地域独自における文化の継承は難しくなっている。

調査地域にキーパーソンが見つかることで、「今度はぜひ子どもたちを連れてきていろいろ教えてほしい、伝えてほしい」ということにより、「子どものための冒険学校」だけではない、成人を対象とした「冒険学校」も始まっていった。

冒険学校の新しい行方について話を進める。

<子どものための冒険学校の歴史>

講座名称	通算期数	年度	フィールド	備考
子どものための冒険学校	第1～3期	1988～1990年	五日市	
子どものための冒険学校	第4～13期	1991～2000年	大滝村中津川	
子どものための冒険学校	第14～15期	2001～2002年	東京学芸大学	デイキャンプ×全7日
ぬくい少年少女農学校	第16～17期	2003～2004年	東京学芸大学	デイキャンプ×全10日程
ちえのわ農学校	第18期～	2005年～継続	東京学芸大学	サークルちえのわ主催

<それ以外の冒険学校の歴史>

講座名称	通算期数	年度	フィールド	備考
沙流川冒険学校	第1～7期	1998～2004年	北海道二風谷	
タイ環境学習キャンプ	第1～18	1995～2015年	タイ王国	
こすげ冒険学校	第1～10期	2006～継続	山梨県小菅村	2004、2005は「やせいキャンプ」
おきなわ冒険学校	第1～4期	2003～2006年	沖縄県読谷村	

1. デイキャンプとなった「子どものための冒険学校」(第14～15期)

第13期までは、五日市～大滝村にて6泊7日の長期キャンプを開催してきた。この頃、何度も議論を重ねた結果、第14期からは、毎月1回のデイキャンプを合計7日間行うことで、これまでの冒険学校を踏襲することとした。会場は東京学芸大学附属環境教育実践施設となる。

藍染体験や昆虫教室。豆腐作りなど、これまでの実績を生かした活動を行っている。

なぜ、14期から長期キャンプを止めてしまったのか？大きな理由は2つある。

第一に、スタッフ全体の力量が低下したことにより、十分な安全管理が難しくなったことである。そもそも自然文化誌研究会は、伸び縮みする組織であり、「去る者追わず、来る者拒まず」という体質がある。冒険学校における考え方は継承されていたが、安全面に関しては、赤十字の方をお招きして事前に行う医療講習会だけでは追いつかない。自由な組織であるが故の矛盾を抱えている。

第二に、自然文化誌研究会全体で、率直に言えば「飽きた」ということだ。パイオニアワークを心掛け

る当会において、冒険学校がマンネリ化してしまったのだ。この思いは協力してくれるスタッフよりも運営サイドに強かった(運営委員会・事務局)。6泊7日の長期キャンプスタイルは当初パイオニアワークであった。10年以上経った時に、多くの団体が長期キャンプを開催している。自然文化誌研究会として当初の役目＝パイオニアを十分に務めた！ということであり、新たなフィールドを開拓することをしたかったのだろう。

実際に、1998年まで事務局長であった岩谷美苗氏は、樹木医として新たなNPOを立ち上げて活躍している。

2. 「ぬくい少年少女農学校」(第16～17期)

東京学芸大学附属環境教育実践施設で開催した「子どものための冒険学校14～15期」。どうも、こいつは冒険学校ではないなあ・・・ということであった。毎月1回のデイキャンプを生かすのならば、何を核とするか—「農」だ。ということで、冒険学校の継続として「ぬくい少年少女農学校」とした。

この頃、東京学芸大学教育学部には「F 類環境教育学科」が編成されたため、冒険学校のメインスタッフが、冒険探検部学生から、環境教育学科の学生に変遷している。

「種から便」へをテーマに、「待つ精神」をもった農学校としてスタートする。自然文化誌研究会とともに、学生スタッフにもぬくい少年少女農学校の事務局・運営を一緒にやった。

通算の第17期を終えたときに、東京学芸大学の公開講座としての取り組みも終了した。

17期目は、この頃、事務局機能が山梨県小菅村に移動しているため、実質的な運営は環境教育学科の学生たちが行っている。

冒険学校のその後① ～ぬくい少年少女農学校～

13年間続けてきた農山村での生活体験キャンプのスタイルから新しいスタイルへの挑戦の一つとして、14期冒険学校から東京学芸大学でのデイキャンプを始めました。そして翌年の2002年、年間を通じた食農体験学習の場として新たに東京学芸大学公開講座「ぬくい少年少女農学校」として開校することとなりました。ぬくい少年少女農学校の三年間の活動には、延べ人数159名(参加者61名、学生スタッフ数98名)の人々が関わりました。テーマは、「種から胃袋まで」(中尾佐助)の体感。これまでの冒険学校のスタイルを引き継ぎながら、大学の農場を舞台にどんな活動が展開できるのか。スタッフも参加者も、みんな手探り状態からスタートしました。今思えば、ぬくい少年少女農学校が「冒険学校時代を知らないスタッフ」の奮闘記の初めの一步になっていたのだな—と思います。

2002年度 第一期

初めはスタッフも参加者も手探り状態。本当にみんなが「わからない」という形からのスタート。だから、参加者のみんなが毎回楽しみに来てくれるのは嬉しいんだけど、、、いつも活動前にスタッフは必死になってプログラムを練っていたのを覚えています。中でも、参加者との接し方や働きかけ、農学校とは何なんだ!?というディスカッションをたくさんした様に思います(この議論は農学校8年目の2009年現

在もなお続いていますね)。

畝を立てるのにも一苦労の種まきから始まり、ほおの葉でのちまきづくり、泥んこの田植え、マイクロバイクを使った彩色園の地図作り、基地・パン釜作り、身近な野菜(玉葱の皮、茄子の皮、トマト)を使った染め物Tシャツ作り、鍋パン作り、芋版、芋煮会、正月飾りなどなど、盛りだくさんの一年間でした。僕の一番の思い出は、、、何ととっても太い竹で作った初めてのバームクーヘン！みんな、覚えてるかな？

第一期農学校。木俣先生(カツンボ)、原子先生(アトム)のアイデアや助言に助けられながら、何とかやり遂げたぞ————!という一年でした。

(参加者 17 名、スタッフ 25 名)



2003 年度 第二期

この年の始まり。それはこわ〜いこわ〜いスタッフ会議から始まったのでした。今でも伝説として語り継がれるくらいの。どんな会議だったのか！？それは、その時に新入生で参加した4人組に聞いてみて下さい。「たけ、しぶ、さぶ、はり」、その後数々の伝説を生み出す4人衆参戦の年でした。たくややかちゃんもこの年の新入生でした。二年目ともなると大所帯になるもので、スタッフのバリエーションも大学院生・社会人・他大学の学生と多様化し、新スタッフを沢山迎えた年でした。自然文化誌研究会のスタッフ(井村家、鈴木家、宮本さん)も加わって、飛躍的に忙しさが増しました(汗)。夏には小菅村へのキャンプにも行ったな〜。この年の思い出といえば、失敗の連続…。高くし過ぎた畝立て、強風でトウモロコシの苗が倒れ、べちょべちょのお餅つき、白菜とのらぼうは冬の霜と鳥たちに根こそぎやられました。「農学校なのだからもっと畑・田圃への関わり方を強めよう！」と畑作りや田畑の手入れに重点を置いた年だったんだけど、、、でもどれもこれも今となってはいい思い出ですよ！！

しぶ&ゆき&ふじさんの料理人コンビの登場、たっくんの「ゲッツ！」の流行、宮本さん指導の豆腐作り、最後に登場したのは飛び出す修了証、思い出の尽きない一年でした。この他にも、収穫祭(野菜料理大会)、どろんこ稲刈り、小菅村での文化体験、樹木の葉を使った染め物、、竹を切つての流しそうめん、腐葉土作り、注連縄作りなど。急激に活動を拡張した年でした。

(参加者 14 名・スタッフ 30 名)



2004 年度 第三期

定員の 25 名を超える沢山の応募(41 名)がありました。せっかく活動をしているのだから出来るだけ多くの子どもを参加させたい!!!という想いで、田畑を拡張して、大人数を想定した活動計画・スタッフ配置を考えて、2009 年現在の農学校までを考えてもこの 2004 年度が最も大きな規模の農学校を運営した年なのではないかと思えます。何だか毎年、「拡張し過ぎた」と書いているのに、さらに大きくなっていたのです。そして、またもや規模の大きさにさらに翻弄された年に。。。活動日は全部で十回!!! 宿泊も2回(夏と冬)に増えました。この年は多くの一年生が仲間入りしました。あや、つつ一、まつ、れいにん、みつみ、まっきー、めぐ、イタロー、やまたか、かずぱん、、、、初農学校スタッフがいっぱい。今や INCH でキャンプの料理番となっているあやちゃんもこの時はピカピカの1年生でした。

活動として新しいアイテムとなったのが「スケッチブック」。まだ持っている人も多いよね。ぜひこの機会に読み直してみましょ! スケッチブックには、その日の活動内容や気が付いたことや感じたこと、疑問に思ったことなどを絵や言葉、写真や押し花などで書きました。次の活動の時には、前回の振り返りを配って貼りました。農学校の年間の活動のつながりをより強く感じられるアイテムになりました。

檜原村の山の中まで活動用の間伐材を取りに行き木工・薪割り・東屋づくり。アイヌの浦川治造さんをお招きしてのアイヌ料理、本物の農家の現場を見学(みんなより背丈の高い野菜に囲まれたよね)、太陽光でお風呂を沸かそうプロジェクト、夕顔でのかんぴょうづくり、ジャンボカステラ作り、「植物に名前を付けよう!」プログラム、鮭のチャンチャン焼き作り、竹で水鉄砲作り、新しい活動プログラムが沢山生まれた年でもありました。活動写真の数は、何と過去最多の 2570 枚!!! 撮り過ぎ。。。。

(参加者 30 名、スタッフ 40 名)



初めて包丁を握った人、野菜嫌いだけれどちょっとずつ食べられるようになった人、学校や年齢の枠を超えた仲間ができた人、土を触れるようになった人、昆虫に触れるようになった人、ちょっとお父さんお母さんから自立し始めた人、子どもと接するのが平気になった人、人前で喋れるようになった人、たくさんのみんなの成長の場となったぬくい少年少女農学校。でも、活動を続けていく中で、農作業、文化体験、調理、安全管理、多くの面で規模とスタッフの力量・容量との兼ね合いに問題が生じてきてしまっていました。沢山の年齢の子どもや大人が同じ場にいるほど、活気がある疑似社会ができる。でも、今の慌ただしい形態が農学校のコンセプトに合っているのだろうか。そんな疑問を持つ声も少なくありませんでした。



農学校のテーマは何だったのか？何を伝え、何を感じてほしいのか。その初心に立ち返るために、私たちはまた新たな形の農学校へと歩むことにしたのでした。

(西村 俊)

保護者アンケート集計結果

解答数:25 無回答:1 有効解答数:24

Q1. 本年度の公開講座をどこで知りましたか？(複数回答)

a. 大学からの募集案内	22
b. アサヒタウンズ	1
c. 知人の紹介	0
d. 去年から参加	1
e. その他	2(aに該当)

あなたのお子さんについての質問—あなたから見て、分かる範囲でお答えください—

Q2. あなたのお子さんの参加動機はなんですか？(複数回答可)

a. 以前から食や農に興味があった	8
b. 「農学校」を知って、食や農に興味があった	3
c. 面白そうだから(野外観察や動植物が大好き)	13
d. 友人・知人が参加するから	3
e. 保護者からの勧め	7
f. その他	0

Q3. 「農学校」に参加する以前にお子さんには食農に関する体験学習活動の経験がありますか？

(複数回答可)

a. 学校	0
b. ご家庭	6
c. その他・サークルなど	2
d. 特にしていない	17

b. ご家庭

- ・農家であり、市の農業体験の会場として、大根、とうもろこし、じゃがいも等経験
- ・ごく近所に住む祖父母が農家の為うまれてからずっと
- ・食卓に上る食材などについて話しをする
- ・2年位前から食物を育てたり、調理をしたがったりしました
- ・幼児の頃よりベランダ栽培、親せきの貸農園作業
- ・小1の頃から家庭菜園で、父の手伝い

c. その他・サークルなど

- ・ボーイスカウト活動を通し野外料理に興味があるようです
- ・センス. オブ. ワンダ自然学校

Q4-1. お子さんは、ご家庭で「農学校」のことを話しますか？

Q4-2. どちらから話しかけることが多いですか？

Q4-1	Q4-2	計	合計
a. よくする	a. お子さん○	9	11
	b. 保護者●	1	
	無回答	1	
b. たまにする	a. お子さん◇	6	13
	b. 保護者◆	5	
	無回答	2	
c. ほとんどしない d. しない		0	計 24

Q4-3. 具体的にどんな話をされましたか？

- 一日の活動内容(収穫方法) スタッフの方との関わり
- 主に収穫物に関すること
- 畑の作物のこと、スタッフの方々との交流
- フォーくんのこと 食事が毎回、とてもおいしかったということ
- 作業内容より、お友達やスタッフの方々とのコミュニケーションのついてが多いです。
- その日に体験した事 いままでやった事がない事 野菜の成長の仕方など
- 楽しかった事を細かく、ずーっと話してます。虫や動物や植物の事等です。
- その時々でやってきた事、スタッフさんのこと 作業の事
- とにかく楽しい、楽しかった事や苦労した事など
- ◇その日体験した事(わらでつなを上手に編めた事)
- ◇食べた物(料理長の作った物はおいしかった！)
- ◇フォーちゃんと遊んだ事 うどんふみ体験
- ◇ひき蛙を友達とつかまえた。もらったサツマイモでスイートポテトを作った。
- ◇畑でドロンコになった。今日は何を植えた。
- ◇ヘチマをもらったけど、これからはどうするの(水に浸けて皮むくのは父)。
- ◇ヘチマの種は鳥が食べてしまった。
- ◇農学校でやった事
- ◇秘密基地のこと 収穫物のこと 宿泊の時は、仲間とどんなふうにすごしたか。
- ◆その日の活動内容 昼食について
- ◆スタッフの方の話
- ◆いろいろな経験をさせて頂いた事 お昼の食事がとてもおいしかった等
- ◆バジルソースを作ってくれました
- ◆農作業

Q5. 「農学校」に参加して、お子さんは変わったと思いますか？

はい:21 いいえ:2 無:1

「はい」の場合、どんなところが変わりましたか？

- ・ 自分で調理することへの興味が増した。
- ・ より活発になった
- ・ 環境について本人から話が出るようになりました。
- ・ 食・環境・生き物に対する関心が深まった。汚れるのが平気になった。野菜の味がわかるようになった。
- ・ 農作物に対する関心が強くなったと思う。
- ・ 嫌いな野菜が減った。
- ・ 野菜がきらいだったが食べれるようになった。自分で調理するようになった。皮や芯も大切に食べる！とおこられた。
- ・ 積極的に物事に取り組むようになった。
- ・ 全てを自ら体験する事で、祖父母が日々している作業の大変さもよりわかったのではないかと・・・
- ・ 自分から進んで土いじりをするようになった。野菜の種をまくなど。
- ・ 自立してきました。(以前よりですが…)
- ・ 植物への興味が強くなった。
- ・ 野菜が食べれる様になった
- ・ 学校以外の活動に興味を持ち積極的になった
- ・ 今後、畑の実体験が野菜や食べ物に対する見方を変えてくると思う。今のところ特に目立って変わったとは見えないが。
- ・ 嫌いな野菜ががんばって食べられるようになった
- ・ 積極的
- ・ 毎回とても楽しみにしていました。作った料理を披露してくれたり、以前父親の菜園の手伝いの時より、野菜に興味をもてるように
- ・ 野菜ぎらいでしたが、持って帰った(自分たちでつくった物を)おいしいといって食べていました。
- ・ 積極性がでてきた。
- ・ 自然に関心をもった。

あなた自身の考えについての質問

Q6. 「農学校」に参加するお子さんと関わる中で、「食」や「農」に対してのあなたの興味・関心は高まりましたか？

a. 「食」「農」ともに関心が高まった	14
b. 「食」に対して関心が高まった	2
c. 「農」に対して関心が高まった	6
d. 特に変わらない	2

Q7. あなたは「ぬくい少年少女農学校」にどのような印象をもっていますか？

- ・こどもが自然と共存する場、または有効に利用すること学ぶ場
- ・食、農がいかに大切かを関わりの中で認識できる所
- ・年間を通した体験に基づいた環境についての学びは、息子にとって貴重な経験になったようで、すばらしい公開講座だと思っています。
- ・とても楽しく御指導を頂きありがとうございました。
- ・ぜひ来年度も参加させたい
- ・貴重な存在だと思い感謝しています
- ・自然の中で学ぶ
- ・「食育」と言う言葉を何気なく聞いていたけれど、今は関心があり、子供自身が興味をもってくれた事がうれしい
- ・子供が体験を通じて知る、学ぶ楽しさを知る場所
- ・親が体験させてやりたいと思っても、できない事が多いのですがこのかんきょうの中で思う存分、1日過ごさせてやれた事うれしく思っております。
- ・「体を使って自分で考えて結果を出すことを学んでいる」と思う。子供にとっては良い体験を積みかせてもらう場
- ・子供が本当に楽しく、生々と参加しているので、とっても良い印象を持っています。ただ楽しく遊ぶのではなく、大学生の方々も小学生を仲間として受け入れて下さり、感謝しています。
- ・野外活動が遊ぶだけでなく農作業を行うことにより、農業がいかに大変で大事なことがあるかを勉強できた。
- ・沢山のスタッフの方々が楽しく自由に運営していただき安心して子供を預けることができました。
- ・いい機会を用意していただいた。
- ・種まき→成長→収穫→食物の過程を体験できる貴重な場
- ・とてもすばらしいスタッフに頭が下がる
- ・のびのびとした心豊かになる時間をすごせる貴重な体験、農作物をより身近に感じられる集まり(→Q8)
- ・安心して子どもを預けられる
- ・普段体験できないことができてとてもよかったです
- ・大変良い活動と思う
- ・安心して子どもを預けられる

Q8. あなたはお子さんを参加させてよかったですか？

はい 24

また、その理由はなんですか？

- ・異年齢の方たちとの関わりもあり、食する物も育ちの実感できた
- ・多数の人との関わりの中で成長した点
- ・息子の農学校での体験と自宅近くの環境との比較の気づきがあり、本人から話題が出たりして机上の学びでは得られない経験になったと思われる点です。
- ・これからの農家のあり方等、合わせてとてもよい経験であったと思います。
- ・生きるための基本でありながら、子どもたちから遠くなってしまった「食」と「農」を体験することができたから。何より子どもが楽しく参加していました。
- ・「食」や「農」にかかわることは、特に今、大切なことだと思うから。
- ・Q5の解答通り(嫌いな野菜が減った)
- ・一人っ子なのでおおぜいの人と関わりをもつ事が少ないので楽しい時間が過ぎた。
- ・Q7の事がたくさん出来たから(子供が体験を通じて知る、学ぶ楽しさを知る場所)
- ・なかなか普段できない体験ができて大変良かったと思う。
- ・Q7 同(親が体験させてやりたいと思っても、できない事が多いのですがこのかんきょうの中で、思う存分、1日過ごさせてやれた事うれしく思っております。)火を使う事。毎日食べているごはんを育てる所から食べるまで など
- ・植物の育ち方を少しは理解した。来年も参加したがっている。
- ・色々な事に興味を持ち、ちょっぴり自立してきました。
- ・食物を育てる経験ができてとてもよかった。
- ・優しいスタッフにかこまれて、色々なことが体験できた。
- ・野菜嫌いだったが、農学校で収穫したものは美味しいと食べられるようになった。
- ・田植え、稲刈りといった基本的農業体験ができた。
- ・こんなにも楽しめるものにめぐりあえ幸です。
- ・のびのびとした心豊かになる時間をすごせる貴重な体験、農作物をより身近に感じられる集まり。生きる上での大切な物を身近に感じられる。
- ・農作物の名前を覚えられた。野川の水量を気にするようになった。
- ・子供が自立するようになったから
- ・農作物や自然に対する関心が高まった

Q9. 今後もこのような環境教育・体験学習の活動に参加させたいですか？

はい 24

また、具体的にどのような体験活動を望みますか？（企画してほしい活動）

- ・サバイバル系（水の浄化、食べられる植物の見分け方）、テントの設営
- ・本年のように1年間を通した体験に基づく活動がいいと思います。
- ・お父さん・お母さんのための農学校（子どもだけにやらせておくのはもったいない！）
- ・「ぬくい少年少女農学校」のような活動に参加させたい。できればもっと回数が多いほうがうれしい。
- ・川やいその生物観察 古い地層を掘り化石探し 流星観測
- ・今度は遠出もしてほしい。
- ・自然や季節を大切にしたりした行事を取り込む。（日本の伝統など）
- ・ぜひぜひ
- ・年中行事（日本の古い風習）を体験させてほしい。
- ・特になし
- ・なかなか家庭では味あわせてあげられないので、自然にどっぷりつかったキャンプ等
- ・記入なし
- ・物を育てることの難しさが少しでも理解して欲しい
- ・食べることに興味をもっと持てるように、食材を育て、収穫し、料理して食べることまで関連づけた体験を望みます。
- ・①いろいろな栽培作業②作物の品種と③味覚（栄養）との実体験を通じて知り、生活者として重要な食のセンスをみがくようなこと。
- ・今年の内容で充分楽しめました。同じ内容でも気候等によって結果が変わってくることなどくりかえし子供に体験させたいと思いました。
- ・サマーキャンプ
- ・今のままで良い
- ・集団活動

農学校のその後 サークル「ちえのわ」の活動

もっと参加者との関係を深めながら、一人一人の成長を見られる活動をしたい。農学校の枠を超えた発展的な活動を目指して、ぬくい少年少女農学校のスタッフが中心となって 2004 年夏に立ち上げたのが環境教育実践サークル「ちえのわ」でした。ちえのわの活動の中で、農学校も「ちえのわ農学校」として継承され、2009 年度で通算 8 年目に突入します。

3. 「ちえのわ農学校」(第 18 期～)

自然文化誌研究会は、小菅村というフィールドを見つけた。小菅村で本格的に活動を行うため、事務局も小菅村に移動した。そのような状況で、小金井にて毎月 1 回の農学校を維持することが難しくなった。検討を重ねた結果、前年度から活躍している学生が中心となってサークルを立ち上げ、農学校を継承していくことになった。「サークルちえのわ」であり、「ちえのわ農学校」とした。

サークル設立の経緯と「ちえのわ」に込めた思い

当時、農学校スタッフであり、INCHのキャンプスタッフでもあった自分たち大学生が、INCHの下部組織ではなく、新しい組織として立ち上げたのには、わけがあります。

公開講座として「農学校」を継承ができないことが決定する以前から、農学校にかかわるスタッフの組織化の議論は何度かありました。「ぬくい」を始めたころ、自然文化誌研究会の青年部を作ろうというような話もありました。そして 2004 年は、特に多くの時間をかけて、今後について語り合いました。その中で、公開講座「ぬくい少年少女農学校」を単に引き続きやっていくためではなく、農学校をはじめとする環境教育活動の充実、質の向上を図っていききたいという思いを共有し、大学のサークルとして独立する方針を固めました。

公開講座の農学校では、スタッフの勉強会などで冒険学校の考え方やノウハウを学び、活動について議論しました。それらをもとに実践する中で「農学校」流の進め方を培ってきました。自らも学び、参加者とともに作る環境学習の場を学生主体で自らの力で発展させたい。独立心・挑戦そんな思いから新しい組織としてスタートを切りました。

その名に込めた思いがサークル化を提案した資料にありました。

団体名「ちえのわ」について

自然の中で暮らす中で、人類は多くのことを自ら学び、考え、実践し、経験してきました。その中で生まれたのが、“智慧”なのです。

“智慧”とは、事の道理や筋道をわきまえ、正しく判断する心のはたらき。事に当たって適切に判断し、処置する能力。単なる学問的知識や頭の良さではなく、人生経験や人格の完成を俟(ま)って初めて得られる、人生の目的・物事の根本の相にかかわる深い叡智(えいち)。と辞書にあります。

ひとが自らの経験の中で得てきた多くの“智慧”を継承し、次世代へと繋げていく。また、今日の多くの諸問題を解決に導くため“智慧”をしぼり、持続可能な社会を創造していく。そのために、自らの“智慧”を深

め、多くのひとの“智慧”を“環”として繋げ、広げていく。複雑に絡まった今日の諸問題“知恵の輪”が解けるようにという想いをこめて『ちえのわ』という名を考案しました。

- 団体名 環境教育(実践)(活動)サークル **ちえのわ**
- 目的 環境教育の実践活動
環境教育に関わる活動の企画・運営を通じて、部員の能力を向上させる
環境活動・教育活動の企画実践
- 活動内容 「食」「農」をテーマとした小中学生対象の体験学習の企画実践
そのほか、各々のテーマを深める。

2004年11月16日 ミーティング資料より抜粋

農学校としては、14期目。ちえのわ農学校としても11期目。今でも活動は続いています。学生も参加者も入れ替わってもそこにかかわる人たちの「みんなと何かやってみたい」という思いがカタチになって「農学校」が継続していることをうれしく思い、「ちえのわ」のさらなる活躍を陰ながら応援しています。
(文責：菱井 優介)

